

医療

市民の生命と健康を守るため、迅速な対応で全国から集まる医療チームを調整

岩手県立高田病院 石木 幹 人 院長



地震直後は、マニュアルに従って、患者や近隣住民を三階に避難誘導しました。午後三時二十分ごろに、防潮堤越しに波しぶきが見え、「大変だ」と思ってからわずか二分ほどで、病院に津波が襲ってきたので、屋上を目指して必死で上げられるところまで行き、約百六十人が屋上で一夜を過ごしました。雪が降る寒い夜で、ビニール袋を頭からかぶったり、院内にあった燃えやすい木々などで火をしたりして、何とかしのぎました。

翌朝、救助のヘリコプターから食料や毛布などを受け取り、患者を優先的に搬送しました。病院のスタッフが、しばらく診療所となる米崎コミセンに到着したのは、十二日の午後四時過ぎでした。この日から患者がコミセンを訪れ、

消防

懸命のご遺体捜索や交通誘導などに心を打たれ、10人を超える入団志願者が

陸前高田市消防団 佐藤 勝 団長



あの日、地震の大きさから、100

部大津波が襲ってくると思われ、震災の二日前にも震度5弱の地震があり、被害がなかったことが安心につながり、住民の避難を遅らせたのかもしれない。地震直後は消防署にいて、水門のモニターをのぞいていたところ、大津波が水門を越え、その一、二分後に海沿いの住宅が流されているのを見て、「これは逃げるしかない」と直ちに消防車に乗り、高台に向かつて徒歩で避難する数百人に向かつて、「こちら、バガ何してんだ。早く逃げろ」と乱暴な口調で怒鳴りながら、必死に高台に誘導しました。その二日後くらいに「あんだだちのおかげで助かった」と言ってくれた人もいました。震災前から、万が一のことがあったら学校給食センターに本部を構えようと決めていましたが、震災当夜、矢作分団で重機を持っていく団員が、がれきの中を本部まで歩いて来たので、「竹駒の国道340号ががれきの山だ。電気もないが徹夜覚悟で車一台通れるスペースを確保してほしい」と重機を持つ団員らに頼み、通行を可能にしてみました。

市内最大の避難所「絆の丘」で5カ月にわたりボランティアや事務局長を務める

絆の丘（第一中学校） 佐々木 敏 道 事務局長



震災当夜から第一中学校にいて、二日後の十三日からボランティアを始めました。震災直後に、コンビニエンスストアやアマタケさんから食料が届き、避難者名簿の作成や駐車場の整理などのほか、大量に届けられる物資の仕分けなどを行っていました。五月一日から絆の丘の事務局長を務めることになりましたが、それまでに高橋勇樹さん（青年会議所理事長）たちが避難所のルールを決めてくださっていたので、スムーズに引き継ぐことができました。事務局長の仕事はハードでしたが、決して苦痛ではありませんでした。避難者とボランティアの間に立つ調整することが大きな役割でしたが、例えばトイレレットペーパーの使い方も節約して使う人もいれば、節約して使う

避難所

史上最大のピンチを救え！ 震災直後のまち

を支えた人たち〈上〉

半年以上にわたりボランティアで物資の搬出、整理に尽力

ボランティア 新川 徳勝 さん



震災直後は、被災した親戚の家の片付けなどを手伝っていて、それに一段落がついたため、四月四日から物資担当でボランティアを続けています。自宅は大船渡市ですが、高田町に嫁いだ妹の家が被災してしまい、陸前高田のために何かお役に立てればと思い、こちらに来ました。

当初は「志半ばで亡くなった人達を弔いたい」という気持ちから、ボランティアの受付窓口、「遺体の捜索がしたい」と毎日のように申し出ていましたが、「それは消防団が行うからできない」ということで、希望は叶わなかったものの、物資のボランティアを行うことになりました。それでも、最初からずっと楽しく作業を続けてきましたし、その気持ちは今も変わっていません。

ボランティアは、場所と種類を選ばれません。続けていけば徐々に楽しくなり、苦が苦ではなくなりますが、楽しみながら、誰かのために役に立っているという実感が徐々に出てきて、光栄に思っています。

物資